

パネルディスカッション

姫路城を活かしたまちづくり

パネリスト 永田 萌 松坂浩史 石見利勝 コーディネーター 田原直樹



○田原直樹 それでは改めまして、よろしく
お願い申し上げます。

まず、このパネルディスカッションの位置
づけと言いますか、ねらいを簡単に触れさせ
ていただきますが、本日のこのチラシにあり
ますように、第1部、第2部を含めての全体
が「未来につなぐ姫路らしい景観」というこ
とで、きょう、冒頭に黒川副市長の御挨拶の
中で触れられましたように、姫路の魅力を高
めるためにどのように取り組めばいいか、そ
れを市民の皆様と一緒に考えたいというこ
とでございます。

もちろん、非常に短い間ですので、ここ
でそれについて深い議論をするところではな
かなかいかないと思うんですが、やはりそれ
ぞれの姫路の魅力のために考える糸口を提供
するのが本日の狙いと言ってもいいのではな
いかと思います。

第2部のパネルディスカッションの中では、
「姫路城を活かしたまちづくり」ということ
で、特に、きょうは景観が前面に出ておりま
すけれども、景観というのは非常に大きな概
念でありまして、私の専門的な分野では、景

観というのは基本的に目で見える部分のこ
とを言うんですけども、狭い意味では。しか
し、それを成立させてる全てのものを含むの
が、実は景観だ。景観の中にそういうものが
全部含まれる。それを先ほどの御講演の中
で、永田館長は、暮らしですとか、営みです
とかが大切だとおっしゃって、まさにその大
切さについて触れられたと思うんですけども、
そういうものでございます。

したがいまして、大切な姫路の景観、姫路
の魅力、その景観を考えるときに、まちづく
りをどうすればいいかということも含めて考
えていこうというのが、このパネルディスカ
ッションのねらいでありますけれども、先ほ
ど申し上げましたように非常に大きな話で
すので、きょうはその糸口をつかんで帰って
いただければと思います。

前置きはそれぐらいにしまして、何しろき
ょうはパネルディスカッション、3人のパネ
リストの方で時間が45分しかないという。し
たがいまして、フロアからの御質問は到底無
理だろうと思うのですけれども、この3人の
方々の御意見をとにかく引き出していき
たいと思います。

まず最初に、姫路の景観の現状、「姫路城
を活かしたまちづくり」ということではな
いけれども、その現状がどういうものかとい
うことから入りたいと思います。

聞くところによりますと、松坂事務局長は、
姫路にお越しになったのが初めてということ
ですけど、そうなんでしょうか。それは信じ
がたい話ですけども、私が事前に事務局か
ら提供された情報によるとそういう話で。と
すれば、なかなかそれも希少価値があるよう
な気がするんですが、初めてでなくてもいい

んですが、外からの目が非常に大切だというのは、先ほど質疑応答の中にも出てきたとおりです。

姫路の印象をまず伺いたいと思うのですが、まずは5分程度でおまとめいただけますと、ありがたく存じます。

それから、個人的には、松坂事務局長は、地域文化創生本部という、何となくわかるんだけど、よく考えるとちょっとわからないなというところにおられますので、簡単にそこも含めて自己紹介も兼ねていただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○松坂浩史 ありがとうございます。初めて姫路に参りました。前は何度も新幹線を通ってるんですけど、いつかおريようと思ってるうちに、つい50年もたってしまいました。

きょう初めて見てみて、何しろ駅からの景観が本当にすばらしいなと思いました。新幹線からももちろんいつも見てましたけれども、駅をおりてお聞きすると、駅前がすごく広々してて、バリアフリーも整っていて、見ても美しいですし、歩いてもいい駅前になってるなど、まず感じました。

私よく申し上げるんですけど、日本で唯一の世界遺産にして国宝城郭、新幹線からも歩いていけるという、日本の中ではまれにみるポジションにあるんだなと思ってます。

どうしても市域が大きいですからいろいろな景観があると思いますけれども、やっぱりこれだけの資源をもっと活用していく必要は本当にあると思います。今でも十分活用されてると思いますけれども、もっと活用していきたいなと思います。

地域文化創生本部ですけれども、今御説明の中にありましたように、実は、私たちの地域文化創生本部の大きなテーマは、「観光」と「暮らしの文化」の2本立てになってまして、観光はまさに資源を有効に活用していこうということでもあります。いろいろなものが日本にありますけれども、文化庁ですから修

理に異常な執念を持っておりますので、きれいに直して、このまま誰も来てくれなかったらいいのにと言った人がいるんですけど、こんなにきれいにしたのだから誰にもさわらせたくないとかいう精神が根付いてますけれども、そうじゃなくて、せっかく大事なもので、みんなに見てもらって、この魅力をみんなに語ってもらえるように、どうやって見ってもらうのか、どうやって楽しんでもらうのか、それは多言語的なものもそうですし、時間帯とか、季節を変えてとか、最近のメディアなんかも使って、VR・ARも使ってと、そういうようなことを地域文化創生本部の中では考えてます。

もう一つは、基調講演の中でもあったと思いますけど、景観には暮らしが含まれるという。文化庁のこれまでの仕事は、きれいに町をつくって、静かな町ができ上がって、おしまいというようなことではいけないと思えます。

伝統的建造物群も、きれいな町並みを残すんですけど、結果的には、それまであった生活がどんどん外に排除されちゃうということじゃなくて、汚くてもとは言いませんけれども、ふだんの生活の中の雑然としたものが残ってるものこそ景観だろうと思ってますので、生きている文化財、文化財と言うと急に冷凍保存感がありますけれども、生きてる状態のまま、変化することも含めて文化的な資源だと考えてます。

文化庁も、これまで文化財と言ってましたけど、10月に組織変えをして文化資源活用課ができました。ここで文化資源という名前にしたのが、一つのテーマかなと思ってます。無形のものとか、変わりつつあるものも含めて文化的な資源だということをやりたいと思います。

とは言っても、文化庁、別に人間が変わってるわけではありませんで、心の中は余り変わってませんが、これから時間をかけて文化資源の活用が進んでいったらいいなと思

ます。

ありがとうございます。

○田原直樹 どうもありがとうございました。

次は永田館長にお聞きしたいと思うんですけども、姫路の景観の現状、先ほどは、どちらかというと姫路の魅力を中心に触れていただいたんですけども、現状を考えますと色々な課題もあろうかと思うんです。

永田館長は姫路に精通してるというよりも複眼的な目で姫路をごらんになれる方だと思いますので、そういう観点で姫路の景観の現状について語っていただければと思います。よろしく願いいたします。

○永田 萌 先ほどからお話も随分させていただいたんですが、何と言ってもお城ですよ。お城の存在の大きさ、私も本当に日本中いろんなところで、お仕事もあって旅行もしておりますが、各地にお城はあります。天守閣はありますが、これほど両翼、左右に広がる風景はまさに姫路城だけだと思うんです。

その巨大さが、逆になかなか生かし切れていないという気がいたします。例えば、美術館、今改修中ですので裏側から出入りするんですが、実は美術館とお城の間に当然お堀りがあるんですが、そのお堀りの四季が本当に美しいんです。石垣に木が生えてるんですけど、それが、春は新緑で、今は紅葉です。水はいつもきれいです。そのまま道をお堀りに沿っていくと、どこまでもお城の周辺を歩くことができるんです。でも、そのエリアは全く人の暮らしのエリアではないわけです。

ですから、人の暮らしが文化財と余り近づいてもいけないんですが、姫路の場合は余りにもちょっと距離があるのが、もう少し、別にそこで暮らさなくていいんですが、もうちょっと日常的に市民の方がお城のせっかくの広さを楽しむような、例えば、祝日とか土日なんか、美術館の庭では何かを必ずやっていると、もう少しそういうことを私の美術館もしないといけないなと考えております。

ですから、お城が見事で立派すぎるゆえに、

それで事足りてしまっているのではないかなというのが、やや辛口の見方を言いますと、そんな気がいたします。もっと活用というには巨大すぎますが、もっとその魅力のお裾分けをみんなでしたいなと思うのです。

以上でございます。

○田原直樹 どうもありがとうございました。

お二人とも共通してる部分があるだろうと思います。姫路城という大変大きな景観資源があるわけですけども、その資源をもっと活用していくべきだという御意見については、外から見ても、あるいは中側の人間についても共通の認識ではないかと思うんですけども、そういう御意見も少し踏まえまして、石見市長には、景観の向上が都市の価値を高める時代に我々おりますので、さらにその価値を高めていくために、どういう取り組みをやってきて、どういう課題があって、どういう解決の方向性があるだろうか。特に解決の方向性については2巡目に少し詳しく語っていただくとしまして、その辺の現在についてちょっと語っていただけたらと思います。よろしく願いいたします。

○石見利勝 ありがとうございます。

姫路市にはお城があるということで、これが物すごく大事ですけども、私がまちづくりをするときは、先祖がこんなすごいものを残してくれたけど、21世紀の我々は、じゃあ何を残すのやと。これから500年先の市民が姫路市を見たときに、我々の21世紀の市民が何をやったか。これも残さないかんやろうということが一つありまして、駅の周辺や大手前通りの計画のときに、近代和風という概念で今やっております。

要するに、和風は大事にするけども、近代性のあるもの、21世紀の我々の意図のあるものを一つ考えております。

もう一つは、永田先生の絵なども見ても、絵はわかるけど、その背後に詩があるんですね。この見えないものに価値がある。サン＝テグジュペリの「星の王子さま、大切なものは

目に見えない」という、やはりお城を見たときに、それを市民がどんなに楽しんでいるか、市民のみんながどれぐらい価値を見出しているか、そういう形としてお城がある。町として町があるけども、そこに市民が、そこでどういう営みをしているか。特に大手前通りなんかは、やはり、おじいちゃんが孫を連れて散歩して、途中でコーヒーを飲むと。買い物客がいっぱい歩いて、お城を振り返りながら買い物をするという市民の営みがあってこそその景観やろうと。

だから、道だけあって、お城はありがたいけど、お城だけあっての景観ではないと。やはり、そこに市民がいて、今見えないけど、ここに市民がいて、いろんな営みをするということが景観であると。それが我々の宝である。

フランスのサンジェリゼなんかも、道に、ずっとみんながコーヒーを飲んで楽しんでおると、あの姿ってやっぱりいいですね。大手前通りも、あちこちにオープンカフェのコーナーをつくっておるんですけども、これから市民がいろんな営みをしてくれることが景観計画の重要な。ただ、もう一つ、やはり我々としては、先祖が残してくれたこのお城という重要な資源を、我々がいかに大切にしているかということもやっぱり心としてはあらわしたいと。

普通、都市計画法、建築基準法という法律がありまして、ここまでは14メートル、ここまでは21メートル、高さは90メートルと数値が決まってるんです。それを姫路市が、それ1回外せと。お城の高さに合わせて決めていいやないかと。

今、お城の高さで言いますと、備前丸の下が45メートルです。それから、石垣が60.5メートル、一番高い天守閣が92メートル、これに合わせて高さ制限を、全部お城の高さに合わせて制限を今つくりかえてまして、今年度中に、それで姫路の都市計画は、一般に言う全国一律の都市計画法、建築基準法とはちよ

っと違う。お城に合わせた高さ制限をやっているという形で、今度応用していくことにしております。

我々が御先祖に感謝をしながら、未来の市民がさらにその気持ちを強めていける姫路ということで頑張ってもらいたいということで。ちょっと具体性に欠けますが。

○田原直樹 どうもありがとうございました。

姫路の景観の現状について語るには、少し言葉が足りない部分もあると思うのですが、まずは、かなり共通する御意見が聞かれたのではないかと思います。

それは、先ほどの基調講演の中でもありましたけれども、結局人の営みというもの。それは必ずしも松坂事務局長が語っておられなかったんですけども、例えば、文化財が人に与えてくれる力を生かすというのは、結局、物だけを相手にしてるのではなくて、結局人であるということは、3人のパネリストの方に共通した認識だと思えます。

そういう観点から、もう少し、じゃあこれから何をどういうふうを考えていったらいいんだろうか、これから何をまちづくりとしてやっていったらいいんだろうか、その部分に少し踏み込みたいと思います。

まずは、基調講演の中で、先ほど質疑応答がありまして、その中で、後で言おうと思ってたんですけどおっしゃったカフェの話、それから、先ほど一巡目に、市民が日常的にもっと楽しむ工夫が必要ではないかと言っておられたんですけども、特に市立美術館周辺を念頭に置いていただいてもいいと思うんですけども、姫路城、今後どうしていったらいいんだろうかということに、御提案も含めて御意見を頂戴できればと思います。

もちろん、姫路城周辺に限定せずに話を広げていただいても結構でございますので、要は、これから「お城を活かしたまちづくり」をやっていく上で、どういうことをやっていったらいいのか、そのヒントになるような話をお願いできればと思います。よろしくお願

いたします。

永田館長にお願いいたします。

○永田 萌 先ほど御質問を頂戴して、まだまだ、観光客の方が姫路城にたくさん見えるのに、お城に登って、おりて、帰ってしまわれる。あれだけの広い周辺を持っているのに、もったいないというお話がありまして、やっぱりそれは例えば、周辺施設の一つである当美術館も吸引力を今持っていないという御指摘だと思いました。もちろん美術館としての美術は見ていただけるのですが、それだけでは、お城を十分歩き回った後、もう一回広い美術館を歩いてくれというのは、なかなかお疲れですから、やっぱり、休憩点であり、中継点である一休みする場所が絶対にお城周辺に必要だろうと思っています。

そこで元気を回復して、また、もう1回お城に登っていただくのもいいでしょうが、やっぱり2大要素であるミュージアムカフェとミュージアムショップは、これからの美術館が供えておかなければいけない、入館者の方への果たさなければいけない約束のようなものだと思っていますので、私は美術館館長ですからどうしても美術館の話になるのですが、広い姫路城周辺も、姫路市内の、例えば、子供さんたちで考えますと、近隣の小学校の人たちには日常的な親しめる場所だと思うのですが、姫路市は本当に広い市ですので、文化的な象徴である姫路城周辺を楽しむという意味では、個人のおうちのお父さんお母さんに車に乗せてもらってやってくる方法しかなかないと思うんですが、もうちょっとアートを絡めて、お城の歴史もそうですし、いろんな学びを含めて、アートバスと言われるような美術館と学校を結ぶようなバスをつくりたいと思っています。

そのバスという足があれば、小さい人たちにも、例えば、半日、美術館やお城周辺を楽しむというか、学ぶことができますので、やっぱり周辺の人たちには十分満たされる要素ですが、もうちょっと遠いところの人たち、

子供さんたちをどうするかというときに、少し積極的に美術館もこういうワークショップをしますから、そして、アートバスを、手を上げていただいたら、派遣しますから来ませんかというような、こちらからの積極的な姿勢をまず見せることが大事で、来てくれたらいいなというようなことではだめだろうなと思っています。

○田原直樹 どうもありがとうございます。

続きまして、松坂事務局長にお尋ねしたいんですけども、姫路城があることは姫路にとっての大変な強みであり資産であることは間違いありませんけれど、一方、姫路城は文化財として、先ほど石見市長も言っておられましたけれども、やっぱり後世の人に対して、ちゃんと、きちっと保存する必要ももちろんございます。

やっぱり文化財保護というのは、いろんな制約をもたらすところもあった。特に、過去にはそういう部分があったのも確かではないかと私個人的にも思っておりまして、そういう意味で、今新たな方向を模索されていると最初におっしゃっていただいたのが非常に興味深いところですけども、そのあたりを含めまして、そういう観点から、これからの姫路城のあり方について、どういうことを考えればいいのか、ちょっと示唆になるようなお話があればお願いしたいと思います。

○松坂浩史 きょうの読売新聞で文化庁移転が、4回特集でこれから記事になるということで1回目が出てたんですけど、その中に姫路城のことがちょっと出てまして、先ほど申し上げた文化資源活用課の声として。

これまでは、姫路城でコンサートをしようとする場合は、建造物の文化財管理の人の許可を得る世界と、それから、イベントの許可を得る、いわゆる芸術文化のほうの世界とを両方別々にやっていたけれど、これからは一体的にそれをワンストップでできるようになるんですと書いてありました。本当にそうかなと思うんですけど、そういうふうに新聞

に書いてありましたので、そういうようなことも含めて現場主義の行政を一応文化庁としてはこれから京都移転後は目指していますので、そういうものが進むんじゃないかと思ってます。

私たちのほうで今、ユニークベニューという、英語しかないので余りいい言葉がないんですけれども、文化資源の活用は決して観光だけではないので、観光以外の活用の方法も含めたガイドブックみたいなものはつくろうと。これまでは、料理で言えば、完成された料理の写真しか提供しなかったと思うんです、よい事例というのは。

今回は、どういうふうにする等、計画書の書き方みたいなマニュアルをちょっとつくろうかなと思ってまして、例えば、今、我々、二条城が近くにあって、いろいろお話をお伺いするんですけども、まず何かやろうと思ったら、文化財課はもちろんいろいろ文句を言うし、それから警察が、人が集まるんだから警備を対処しろとか、警備会社に頼めとか、消防も火が出たらいけないので消防計画をつくれと、病人が出るかもしれないから救急計画をつくれと、こういうものが必要になったならば、当然衛生環境もやれというようなことで、一つクリアしようと思うと、ありとあらゆる、また新しい課題が全然予想もしなかった部局から来ると。

これではなかなか活用が進まないんじゃないかというようなことで、文化財はこれまで活用させないということを前提に仕事してきたので、活用させないんだから、そういうことは伝えない、教えない、使おうと思ったら大変だよみたいなところがあつたんですけど、使うんだったら、こういうふうに使ったら便利になりますよというか、使いやすいですよというようなことをちょっとやってみようと思ってます。

当然、組織の中でいろいろ、そんなことまでするのかという声がありますけれども、京都で、ちょっと東京と離れていることもあり

ますので、この際そういうのをやってみて、多言語化とユニークベニューと、それから、新しいテクノロジーを使った文化財の楽しみ方、この辺をやりたいなと思ってます。

例えば、私、きょう姫路城を見ましたけれども、秋のお城は見られましたので紅葉は見られましたけど、桜はどうなんだろうとか、雪が降ってたらどうなんだろうとか、新緑はどうなんだろうとか、夜はどうなんだろうとか、朝はどうなんだろうとか、時間とか季節を超えた、遠くから来る方はそんなに何回も姫路に来られないので、そういう人に、姫路城の魅力はきょうだけじゃないよと。きょう1回見ただけじゃなくて、何回も来たくなるようなイメージを植えつけるようなこともできるんじゃないかなと思ってます。

昔は文化財を見るというのは、きれいな写真を見せると写真で満足して来なくなるという声があつたんですけど、最近は逆でして、頭の中にあるものの確認に来るんですよ、行動パターンが。なので、外国の人の中に姫路城のイメージを何層にも植えつけて、あれを見たい、あれを見たいと思ってもらわないと、なかなか人が来ないということがありますので、できるだけ露出をどんどんしていくような、10枚も写真を出すと出し過ぎなので、本当に奇跡の1枚と言われる1枚で売っていくようなアプローチも、これから御提案したいなと思ってます。

御質問と全然違うかもしれませんが、今思いました。

○田原直樹 どうもありがとうございました。

今お考えになつてることが、どういうものなのかということが非常によく皆さんおわかりいただいたのではないかと思います。

それで、永田館長にもう一点お聞きしたいんですけれども、これは先ほど基調講演の中で見せていただいた龍野町等の、あるいは材木町等の町家、まだ少しはやはり残っておりまして、それなりにいい雰囲気醸し出している場所もまだあるんですね。

○永田 萌 はい。

○田原直樹 そういったものも恐らく姫路城の魅力の中に入れてもいいんだろうと思うのですけれども、その辺に対する何かお考え、要するに姫路城の魅力をこれから向上させるための材料として、そういう御意見があればお伺いしたいと思うんですが、よろしく願いいたします。

○永田 萌 わかりました。

やっぱり観光を考えると、滞在というのはすごく重要な要素だと思うんですが、私、朝10時に新幹線に乗って美術館に着こうとしますと、1本しか姫路にとまる新幹線がないんです。私は自由席しか座らないんですが、私以外ほとんどと言っていいぐらい朝早い新幹線の自由席に座るのは観光客の人たちです。でも、その人たちは物すごく身軽です。荷物をほとんど持ってないんです。つまり、京都に泊まっていて、1日観光で姫路に来る人たちです。現に姫路にとまりましたら、私を初めほとんどの人がおりてしまいます。これは、やっぱりちょっと残念です。

さっき松坂さんがおっしゃったみたいに、朝の姫路城を見るなら、ぜひ夜のライトアップした姫路城、その周辺の散策もしてほしいとなると、やっぱり宿泊することはすごく大きな魅力だし要素だと思うのです。

もしも町家と呼ばれるような昔ながらの施設に宿泊の機能を持たすことができるなら、京都でも本当に、これは一般的になりすぎて、やや問題が大きくなっておりますが、それでも姫路の場合はまだ京都ほど逆にたくさんないところで管理もしやすいのではないかと想像するのですが、昔の日本の暮らしを体験してもらおうような宿泊、そういった今ある建物の有効活用と言いますか、そういうことも考えられるのではないかと。

ともかく、もっと長く姫路にいてほしいです。私、2泊3泊されても姫路周辺の魅力はまだまだ尽きないと思います。食べ物もおいしいですね。何とかやっぱり、もうちょっ

と、お城だけじゃないよという魅力を発信できる方法をちょっと知恵を絞る必要があるんじゃないかなと。

二条城なんか大成功しましたね。もう入館者数が画期的にふえましたもの、いろんな試みが確実に形になってるように思いますので。

○田原直樹 どうもありがとうございました。

二人の意見をお聞きして、石見市長にお伺いしたいんですけれども、今後のまちづくり、どうすればいいかということにかなり触発される部分があるのではないかと私思うのですけれども、市長の抱負と言いますか、今後の方向性について少し語っていただければと思います。

○石見利勝 私が市長に選んでいただいたときに、最初に立てた理念と言いますか、共生という言葉を使いました。それは歴史との共生ということで、御先祖が残してくれたものをとことん使わせていただいて、その恩返しに、それを大事に残して次の世代に伝えていく。未来との共生も、結局そういうことでは、来るべき市民の皆さんにこのすばらしい資源を残し、21世紀の我々の工夫を加えて、次に伝えていくということを考えておったんですが、今の市民にとってというところが今このテーマだと思うんです。要するに、お城をいかに活用していくかという話です。

1つは、お城があるからという、姫路のお城がある有利さをどういうふうに使っていくか。例えば、駅前にせせらぎを通しまして、あそこの庭をキャッスルガーデンという名前をつけました。というのは、あそこまでお城があったんだよということを来られた方に知っていただく。

それから、展望台をつくってキャッスルビューという名前をつけました。これも姫路市民が外国や東京へ行くときに、あそこからお城に、「行ってきます」と。帰ってきたときは、あそこからお城に、「ただいま」。観光客は、「よろしく」とお城に挨拶し、「お世話になりました」と帰っていただくという意

味で、あれは姫路でないといつけられない名前だという姫路の有利さを。

それから、この間、お城将棋もやりましたけど、将棋というと天童とか加古川のほうがよく強い方もおられるし、よくやっておられるんですけども、お城将棋だけは見覚えが大事で、お城がバックにあるからできたと思っております。

また、これから、お城百景とかいうようなもので、いろんなところから写真できれいで見覚えがするようなところをもっと掘り起こして、町中のいろんなところを回っていただくというような、お城にちなんだ、お城があるからの有利さと。

もう一つは、お城そのものを活用してしまう。要するに、借景であるとか、その街であるとか、背景に使うとか。最近よくお城のそばでコンサートをやっていただけてますけど、コンサートとか、何よりも最初に申し上げましたオープンカフェ、オープンレストラン、お城を見ながらみんなで食事をしたり、散歩をしたり、そういう毎日の生活の中にお城を取り込んでいただくと。

その取り込み方が、姫路はまだちょっと足らんと思うのは、京都です。京都へ春に行くと、夏の京都を知らんやろ、すばらしいんやで。夏に行くと、あんたら冬の京都を知ってるのかと、京都はええと。ほんで冬の京都はまた静かで何とも言えん、いいんですよ。

そういう意味で、姫路へ来た方に、桜もええけど、余りええと言えるかな、夏のお城も見なあかんでとか、四季のものを売っていくとか、市民の皆さん自体がお城を活用して生活の中に取り込んで、そして、町を設計したり、庭を設計したり、住宅を設計するときに、ここからお城がどう見えるかというあたりも借景として活用すると。そういうふうな毎日の営みの中にお城を活用していくような仕組みの中でお城の大事さが出てきて、もっとお城を大事にしようやないかという機運が出てくる。

そういうことでは、もうお城のああいう庭でゴミを捨てるなんてことはとんでもないと、市民であればできない。京都はそうでしょう。町に行ってもゴミなんか落ちてないですよ。観光客がぼいっとゴミを捨てても、市民が拾いますからね。あれぐらい、やっぱり我々も京都を見習わんといかん。

よく姫路らしさとか何とからしさと言われますけど、らしさが必ずしもいいとは限らないですよ。姫路らしさ、ゴミがいっぱい落ちてるのも姫路らしさですからね。だから、らしさというのもちよっと考えて、ええ点はええけども、やっぱり船場なんて本当に姫路らしいと思うのですよ、ゴミだらけで。こういう姫路らしさはなるべくなくしていくということで、頑張りたいと思っております。

○田原直樹 どうもありがとうございました。

本当に時間が短くて、あつと言う間に本来終わるべき時間が近づいていて、いつもこんなことをしゃべってる場合じゃないと思いながら、いつもこういうコメントをやってるんですが、どうも今までのお話を聞いておきますと、多分に私の主観も入るかもしれませんが、共通する認識があるような気がいたします。

姫路城は本当にすばらしい資産ですけども、そのことに疑いはないんですが、どうも姫路城自体がすばらし過ぎるからと言えるかもしれないんですけども、どうも一点豪華主義的になりやすい恐れがあるということではないかと思えます。

そのために、どうも3人が少し問題提起しておられるのは、城の楽しみ方でしょうね。新しい楽しみ方、もちろん古いものも含めて新しいと言っているんですけども、それをいかに充実させていくか。ということは、城だけの問題じゃないんですね。周辺も含めまして、そこにいる人間も含めまして、そういう話だろうと思えます。そういう楽しめる場をつくることも含めて考えていかなければいけないということは、当たり前のことですけ

ども、非常にこういうふうに多面的な意見として頂戴しますと、非常に腑に落ちるところがあるのではないかと思います。

最後に、姫路の「姫路城を活かしたまちづくり」の締めとして、永田館長と松坂事務局長には、姫路のまちづくりへの期待を簡潔にお願いするといたしまして、市長さんには、それを受けまして、今後何をやっていこうということが、もし明快に言えるようなことがあるようでしたら、それについて少し語っていただけたらと思います。

では、永田館長からお願いできますでしょうか。よろしく願いいたします。

○永田 萌 私は、先ほど、松坂さんがちょっとおっしゃったユニークベニューがやっぱりキーワードだと思っています。

つまり、文化財を活用しながら、文化財を一番身近に守らなければいけない市民の方々が文化財で楽しむという。美術館もその一部ですので、もっともっと、まだまだ魅力が掘り起こせるはずとっておりますので、美術館は特に前庭を有効活用しながら、ユニークベニューの素敵なメニューをつくっていききたいと考えております。

○田原直樹 ありがとうございます。

続きまして、松坂事務局長、お願いします。

○松坂浩史 先ほど二条城の話があって、夏に朝がゆをやってるんです。朝5時とか6時ぐらいから二条城の中で朝がゆが食べられる、これもユニークベニューなんです。たしか4,000円ぐらいするのですけれども、平日の朝、二条城で朝がゆを食べるのです。

観光客が多いかと思いきや、京都市民の申し込みが多いんです、出勤の前に。チケットがとれないんです。

この間、週末ちょっと市内を回ってたんですけど、市役所の人とかにも普通のお寺で結構会います。きょう、お茶会があるから来たんだとか、きょうは梅酒祭りをやってるから来たんだとかと言って、市民自体が市のいろんな文化財を楽しんでる姿は、東京もそん

なことはないので余り偉そうなこと言えませんが、やっぱり私たちも京都を勉強して全国に展開できればいいなと思っています。

姫路城は、私のイメージだと、恐らくフランスのベルサイユ宮殿のような、世界で幾つかお城を上げろと言ったときには出てくるお城で間違いないと思いますので、ベルサイユ宮殿には宿泊もできるし、最近レストランもできましたし、そういうような形での、これはユニークベニューと言っているのかどうかわかりませんが、もっと楽しむ側面を切り取っていけばおもしろいことができると思いますので、世界の人たちが「姫路、姫路」と言う日を待っていたいなと思います。

○田原直樹 ありがとうございます。

では、石見市長、お願いいたします。

○石見利勝 姫路城、本当に御先祖がこんなすごいものを残してくれたということ。ただこの姫路城は奇跡的なお城でして、連合軍の空爆にも生き残ったということでは、これを本当に大事にしていくことが我々の責任としてあると思います。

今、姫路市は播磨8市8町と連携して連携中枢都市圏ということで、播磨を今売り出しにかかってます。播磨は非常に歴史がありまして、本当に奈良王朝ができる前から人が住んで、いろんなことをやってたわけです。そういう歴史文化を大事にし、みんなで播磨を発信するためには、まず姫路城というマグネットをさらに強力なマグネットにしていって、これにどンドン人を引きつける力をつけようということで考えておまして、その一つは、ツインキャッスルとか姉妹城ということで、フランスのシャンティイ城という物すごい美しいお城があります。

それから、ドイツのノイシュヴァンシュタイン城。これ今世界で一番美しいと言われてますが、3年前から姫路城と姉妹城で。ノイシュヴァンシュタイン城は、お客はいっぱい来るんだと。ただ、姫路城のような世界遺産のステータスが欲しい、だから仲よくしよう

と。こういうことで言ってこられたんで、よっしゃ、仲よくしようやないかと。あんたとこ200年の歴史しかないやろう、うちは400年やと言って威張ってたなら、そしたら、今度イギリスのウエールズからツインキャッスルやろうと。やりましょうと、この7月に行ってきたんです。

これがウエールズのコンウィ城、うちはローマ軍と戦ったことがある。800年と言う。ちょっと待ってくれと、えらい調子悪いとこへ来たなと思うけど、「姫路キャッスル・イズ・ベリー・ニュー」と言いながらつき合っておりますけれど、こういう形で世界に今打ち出しつつあります。

もう一つは、やはりお城を楽しむ環境、仕組みです。まさに、もう七、八年前から、あの美術館の中庭を使って、オープンカフェで、お城を見ながらゆっくりと皆さんがコーヒーを飲んだり、アイスクリームを食べたり、楽しんでいただけてる。

これ、きょう松坂事務局長が来られたんで、私喜んでるんですが、毎回文化庁にペケ食らってるんですよ、もう8年ぐらいになりますよ。毎年行って、オープンカフェを何とかあそこにといいことで。でも、これで一気に追い風が吹きますんで、近いうちにいけるん違うかと思いはじめました。そういうことで、美術館とか、ああいうお城をみんなで楽しむ環境とか仕組みができてくるということでは、これからもっと力を入れていかんといかん。もう一つは、物語です。先ほども目に見えないものに価値があるという話をしましたが、播磨にはすばらしい物語がいっぱいあるんですよ。聞くと、本当に心温まる。

生野に銀山があって銀が採れまして、日本で最初の高速道路は銀の馬車道、生野から姫路の飾磨港まで、高速道路第1号です。これをつくったのがシスレーという技術者で、この技術者が生野のバラをフランスのリヨンに送りまして、リヨンでお父さんの仲間の造園家がすばらしいバラに仕立て上げて、そして、

東北の大震災を応援しようということで、このバラに「絆“KIZUNA”」という名前をつけて東北に送ったんです。

その送るときに、こっちも聞きつけて、ちょっと待ってくれと。東北に行くのは本来の仕事やろうけど、ついでに姫路にも里帰りさせてくれということで、このシスレーのバラが今、里帰りしております、先ほど申し上げましたキャッスルガーデンにシスレーのバラという名前で植えておりまして、きれいな花が咲いています。

このシスレーは、皆さんがお好きな絵描きさんのシスレーの一族でして、そういう心温まる物語がいろいろあるんですよ。

頼山陽が海辺を歩いて、きれいな景色を見て、あれ、これ赤壁やないかと言ってくれたんで、小赤壁というのがあるんです。

そういう歴史にまつわる物語をどんどん掘り起こして、市民の皆さんが語り部になっていただいて、京都と一緒にですね。京都に行くと、そうでしょう。皆さんが、どこから来た。今度、どこへ行く。金閣寺か、仁和寺も近いで、みんなおっしゃるでしょう。あの京都市民のあのおもてなしの精神を姫路でも頑張りたい。どうぞよろしく願いいたします。

○田原直樹 どうもありがとうございました。

今の3人の御意見が、ほぼ、きょうの結論ということになるわけですが、最後に2分ほどお時間をいただいて、ちょっと振り返りだけやって締めたいと思います。

まず永田館長のきょうのお話ですけれども、基調講演の分まで含めてお聞きしておりますと、私の耳にとっても強く残ったのがありまして、1つは、やはり若い時期を過ごした体験が精神形成にとっても重要であるというお話だったと思います。子供たちにとっての価値というのが非常に記憶に残りました。

実は、そのあたりは、現実の、例えば、観光とかの側面を考えたときには、何かちょっと忘れ去られてるものだなと、ちょっと感じたところです。

もう一つは、既に存在するものに対する敬意は、景観づくりの出発点であるというような趣旨のことをおっしゃったんですけども、これはとても重要な認識ではないかと私は思いました。

次に、松坂事務局長のお話ですけども、やはり文化財行政が少しずつ変わってきてと言いますか、文化財の活用に対するハードルを下げる試みを今とてもされてることがわかりまして、そのときの考え方が、文化財が人に与えてくれる力を生かすということが非常に大切に意識されてるということだと思えます。そのあたりが一つの背景になって、どういうまちづくりをしたらいいかということになるのではないかと思います。

最終的に言いますと、石見市長のお話ですけども、結局物語が必要であるということです。そのあたりは、松坂事務局長が、文化財を、例えば、外国人の方が来られて、どういうふうに語ってもらおうかと言っておられたんですけど、まさにそういうことだろうと思うんです。そのときにユニークベニューというのも、つまり、ここにしかないようなものがとても重要だというのは、まさにそのとおりだと思うのですが、さらに多様な魅力をプロモーションするという、かなり明解な戦術が必要だということを指摘しておられました。恐らく、石見市長は、そういうことを今から姫路でやる。そういうお考えだと思ったところでは。

そういうことで、きょう、冒頭に申し上げましたように、ここでなかなか結論が出るような話ではなく、ヒントを市民みんなで共有して、持って帰っていただくということだと思いますので、きょうの非常に短いシンポジウムで、なかなか時間内に納めきれなかったんですけども、その点はおわびすると思いたしまして、今申し上げましたことを、きょうの成果として持って帰っていただければ、幸いに存じます。

それでは、3人のパネリストの方には、大

変つたない司会のもと、短い時間の中で、こちらの指示どおりに語っていただきました。どうもありがとうございました。

盛大な拍手をお願いいたします。

それでは、これでパネルディスカッションを閉じさせていただきます。御清聴ありがとうございました。